

記の編纂に携わっている。原田は西園寺公望の私設秘書で、その日記は、『西園寺公と政局』（全八巻、一九五〇〜五二年、別巻、一九五六年、岩波書店）として刊行された。その編纂の過程でヒアリング

をした元内大臣秘書官長松平康昌の話に影響された旨を「松平さんの話は、ぼくには強烈な印象を与えました」といい、また先の三つの類型も「どこから着想を得たのか、ぼくはわからないのだけれども、意識下には、その松平さんの話があったのではないかという気もしています」と述べて次のように語る。

神輿とは結局、天皇になるわけです。それが、あの人の実感なのです。学問的な説明ではないけれど、その人の実感として面白かった。重臣リベラリズムの限界というのは、一つはそういうことです。だから、天皇制の問題にも、無責任体制の問題にもなるわけです。一貫して政策決定の主体はどこにもないという問題です（『回顧談』（下）八〜九）。

そしてその話は、「日本の戦争への道程」についての「実に面白い比喩」として次のように記されている。松平の話は、説得力をもって丸山の心に迫ったであろう。

それは「お神輿」を担いでいるようなものだという。初め数人の人が「神輿」を担いである所まで行った。担いでくる間にくたびれた。すると次の者がどこからともなく現われて、また「神輿」を担ぎ、ある地点まで行って面倒くさくなって投げ出した。こうして最後に谷底に落ちた。これが日本の満州事変以後の過程だ、というのである。だからこの場合、「谷底へ落ちたことしたのはたれか？」と詰問すれば、最初の奴は「俺はこの地点まで担いだが、それから先は知らない」と

いう。次の奴も同じようなことをいう。最後に谷底へ落ちた奴を詰問すると、「ここまで

来たら後は谷底へ落ちるしかないじゃないか」というだろう（『続補遺（日本支配層の戦争責任）』（一九五六年一月『別巻』））。

さらに丸山は原田日記を読むなかで「驚いたこと」の一つとして、西園寺公望も含めて重臣たちには共産主義革命に対する恐怖が「大きなモーター」になっており、軍部内の急進ファシズムも「アカ」でボルシェビズムになるといふ恐怖として作用していたことをあげている（『回顧談』（下）一一二）。こうして丸山は、重臣リベラルといわれる人びとのありようを具体的に見つめながら、彼らとの決別を成し遂げていったのだといえよう。

「大衆」の意識と向き合う

知識人が民衆とどう向き合うかは、「悔恨共同体」のメンバーたちをはじめ広く共有されていた問題であり、先に述べた飯塚浩二ら丸山を含む七人が「新学問論」と題して行った座談会のテーマの柱ともなっていた。大塚久雄は、「ぼくも民衆の問題を知識人の問題にしくちやならないということ

は全く同感なんです、実際にやってみると、それは大変な難かしい仕事でしょう。問題は教わるんですけれども、さてこちらが民衆の問題に取っ組んで、民衆に話しかけようとしても道を以てしなければちょっとやそつとでは受け付けないと思う」と「啓蒙」の難しさを、生の言葉で語っている（『新学問論』『座談』①）。

他方丸山は、民衆の間に起こってきている文化運動を積極的に進めるべきだとする瓜生忠夫の発言を受けて、「学者とマッセの結びつき」は観念的にはわかるとしながらも、知識人が安易に民衆に寄り寄ることへの懐疑を率直に語った。

それは簡単に言うと、民衆の問題というのは、むしろやはり自分のなかにある内面的意識の問題で、やたらに民衆民衆という問題じゃないのではないか。やたらに方々に講演して歩いたり、ジャーナリズムに書いたりするのではなくして、最も本格的な仕事をする事、それがはるかに民衆のためであるということも考えられる。もう一つ日本の学界の問題としては本場のアカデミズムというものが欠けているのではないか。日本でいうアカデミズムというものは血のにじむような苦しみが無い。ペーターヴェンなんかは「民の声は神の声など」ということは信じない」といった。それは経験的民衆に媚びないということ、決していわゆる超俗主義ではない。彼はあつべき民衆に彼の芸術を捧げた。しかし当時の民衆はロッシーニのオペラの方を喜んだ。ペーターヴェンのシンフォニーというものはやはり民衆の方から立ち上つて、そこに向つて接近して行くという意識的な努力というものがなければいけない高さだ。マルクスの『資本論』でもそう。だから学問の民衆化ということは単に表現形式を平易にするとかそういうことでは問題は片づかない。学問の行き方として、最高水準というものは、やはり現実問題として普通の生産労働に追われている民衆には、理解に困難があると思う。

一方で「それかといって学者がみな啓蒙活動に出てしまったら本場に活動は出来ない」のであり、丸山は、「学者と民衆の間にあるもの」「媒介をなすもの」、すなわち民衆を高めるのが「ジャーナリズムの使命」であるという。

先にみた丸山のファシズムの担い手についての分析で、知識人のみならず「大衆」のありようも率直に論じたのは、まさに「血のにじむような苦しみ」を伴うものであつたにちがいない。丸山は、「学者が行脚に行くというような形よりも、民衆のなかにいるという意識の方が大事なんじゃないか」と繰り返した。丸山が憂えるのは「本当のアカデミズムというものはまだ日本になく、日本にあるのは「変に閉鎖的な特権的意識だけだ」ということであつた。「私は簡単に今のアカデミーの人が、人民のためといえ、それで直ちに民衆のものになつたというような安易な考え方をしたくない。民衆と口先だけでいうことが一種のマスターベーションになつてはいはしないかと思う」と語っている〔新学問論〕『座談』①。丸山の「民衆のなかにいるという意識の方が大事」という言葉に込められた思いは、「人民のため」と考える人びとに届いたとはいいたい。

民衆のなかにいて、その民衆の声をどのように聞き入れるのかもまた重要な問題であつた。丸山はインテリが「大衆の車中での放談」のような「民の声」を過小評価し、「サインの認識とゾルレンの判断との落差に対して、フンそんな事は分り切つたことさ、といった態度でそこに含まれている重大な問題に対して不感症になつている傾向」を問題視する。あるいはまた、「是を以て未組織の小市民の浮動性の表現として片づけ、組織労働者の闘争を通じての階級意識の形成こそ本来の民意であり、そうした「民意」は現在急速に昂まつているという事実——私はそれを決して否定しない——に安ん

じて、事態を不当に樂觀視する傾向が民主陣營のなかに存在しないだろうか」との問いを投げかける。そうしていう。

今日なお広汎な大衆の間に、上の様な認識と価値判断といわば銜^{シユエ}状差が見られるということは、終戦後あれほど活発に啓蒙活動が行われたにも拘らず、進歩的陣營の思想のせいぜい結論だけが受取られて、そこに到達する論理過程が一向大衆の肉体化していない事実を物語っている。そうして、一定のデータから正しい意味を汲みとる思想的訓練が普遍化していない限り、いいかえれば大衆の価値判断を一定の方向に流し込む鋳型の様なものを進歩的思想がつき崩して行くことに成功しない限り、急進陣營によって試みられる一切の現実暴露戦術はかえって全く逆の効果を生む恐れなしとしないのである。

そうしてそれは「はつきりした目的意識を以てザインとゾルレンを結びつけている様に見える組織大衆乃至は進歩的インテリゲンチヤ」も同様であると（「車中の時局談義」一九四八年二月『集』③）。かくして丸山もまた、民衆の非合理的意識と向き合い、格闘していたのである。そうして、ドイツやイタリアのファシストは、大衆の「意識下の世界、合理的論理ではなくして非合理的な「論理」に噴き入ることにかけては一切の民主主義的陣營を凌駕していた」（同前）という現実を直視するとき、ありのままの「民衆の意識から可能性をくみ取ることに終始していることはできなかったのである。

「精神的価値」への「大衆」の参与

一九四九年、「現代社会における大衆」と題して猪木正道、田中耕太郎と鼎談が行われた。そこでの発言から丸山の力点が「個」からしだいに「大衆」という集団に移動してきたことが見てとれ、「現代文明の最大の特色」である「上からと下からの社会生活の組織化集団化」が国際的規模で進行するなかで、「通常近代社会の支柱とされている個人の人格的独立とか、個人の自律とかいうものは巨大な装置と集団の中に埋没してしまうのではないかという問題、それが大体世界の思想家によって共通に取り上げられている現下の最大問題だ」と語られている（「現代社会における大衆」一九四九年一月『座談』①）。

「近代」と「現代」の同時進行のもとにあって、丸山の言葉でいえば「現代の人間の救済」のためにマルクス主義は避けて通れないものとしてあった。なぜならば、マルキシズムは世界観としてはそれ自身完結的なものではなく、「どこまでもパラドキシカル・トゥールース（逆説的真理）」であるが、「現代社会の集団化、しかも集団化が階級的分化と結びついていることを考えると、現代の人間の救済というものはや個人的な形では出来ない」のであり、「その日の生活に追われ、あるいは利那的な享楽に生きる大多数の民衆に、生活への意欲と未来への希望、現代社会に生きるハリと価値といったものを果して、いかなる原理とかなる制度が現実を提供しうるか。それによって、その原理なり制度なりのレーゾン・デートル（存在理由）がきまる」からであった。他方、「近代社会における個人の独立とか自律とかということも、現実にならざるものは、一部の知識階級だけで、世

評伝 丸山眞男

その思想と生涯

黒川みどり



評伝 丸山眞男

その思想と生涯

黒川みどり

